

大飯原発から30km圏内 9月14日 滋賀県高島市 椋川地区・朽木地区の訪問記



2017. 9. 22 避難計画を案ずる関西連絡



椋川の清流、山と田畑に囲まれた地区



朽木地区の避難道路 県道783号はとても狭い

9月14日、大飯原発から約30km圏内に入る滋賀県高島市の椋川地区、朽木東小学校区の地域を訪問し、住民の皆さんの声を聴きました。7月22日（今津町）※¹、7月27日（朽木西小学校区）※²の訪問に続き、3回目の訪問です（地図の星印は7月に訪問した地区）。「避難計画を案ずる関西連絡会」の呼びかけで、滋賀県内各地（朽木、高島、大津、甲賀）と大阪から9名が参加しました。再稼働に反対する声が多く、避難道路が災害に弱いこと等多くの皆さんが心配されていました。現地の様子を紹介します。



※¹： 7月22日今津町訪問の報告 http://www.jca.apc.org/mihama/saikado/imazu_rep170722.pdf

※²： 7月29日朽木西小学校区訪問の報告 http://www.jca.apc.org/mihama/saikado/kutsuki_rep170727.pdf

地区名	世帯数	人口	集合場所	避難中継所 スクリーニング場所	避難先		
					滋賀県内の避難先	県外 拠点避難所	避難所
みながわ 椋川 (今津町)	26	48	ECC 学園高等学校	今津総合運動公園	今津中学校	大阪府高槻市 総合スポーツセンター	未定
朽木東小学校区							
じしほら 地子原	35	76	朽木公民館	朽木中学校	グリーンパーク思い出の森 ★原発から約 32km 地点 避難先には近すぎる	大阪府大阪市 鶴見緑地	未定
うとだに 雲洞谷	33	79					未定
あそ 麻生	39	84					未定
きじやま 木地山	8	16					未定

[全体的な特徴]

- 大飯原発から 30km 圏内で避難の対象になることは、ほとんどの方が知っていた。福島原発事故をわが身の問題として感じて、再稼働に反対を表明する人がとても多かった。「反対が当然」など明確にやめてほしいと語る人、嫌だ、賛成はできない、防災対策を立てるべきと語る人、自分は構わないが孫子が心配と語る人など、全体的に再稼働に反対、あるいは心配する人が多かった。
- 今津町椋川地区は、避難時集結場所が E C C 学園高等学校になっている。学園では安定ヨウ素剤を預かったりはしておらず、他の集結場所と違い、どこに備蓄してあるかは不明だった。
- 高齢者が圧倒的に多く、避難についてはとても心配されていた。
- 朽木東小学校や朽木こども園は避難対象施設になっているが、具体的な避難計画は何も決まっていない。事故時にどのように子どもたちを守り、避難させるのか等決まっていないとのことだった。
- 朽木地区の能家・雲洞谷集落は、県道 783 号が唯一の避難道となるが、道幅は、対向車と行き違いもできないほどの細い箇所もあり、同県道の針畑（朽木の西側。小川～小入谷）を通る部分よりも細く感じた。土砂災害が起きやすそうな所も多くみられ、補修を行っている箇所もあった。
- 3 年前の台風では、約 17 km 離れた朽木公民館へ避難する勧告が出たが、避難道の県道 783 号は災害に弱く避難は困難だと話されていた。

[1] 椋川地区 [26 世帯・48 名]

避難時集結場所「E C C 学園高等学校」には安定ヨウ素剤は保管されていない

1-1 E C C 学園高等学校の近くの集落



おっさん交流館

椋川地区は、高島市今津町の中でも、他の地区とは少し離れたところにあります。椋川の清流と山と田畑に囲まれた、のどかで自然豊かな集落でした。避難道路の国道 367 号から細い道に入って集落があります。家の側に山水を引いて「かばた」を作り、大きな鯉を飼っているお宅が何軒もありました。

蕁茸きの「おっきん椋川交流館」があり、地元特産品の販売や催しもの、都市住民との交流の場にもなっているそうです。残念ながら、この日は休館日でした。近くの集落の方に話を聞きました（「おっきん」とは「ありがとう」という意味で古くから使われている言葉）。

・椋川地区の避難時集結場所は「ECC学園高等学校」です。廃校になった今津西小学校・椋川分校の校舎を使っています。学園の職員の話では、学園の敷地内（職員室等）には安定ヨウ素剤は保管していないとのことでした。職員室等は学園関係者しか入ることはできず、休みの日には鍵がかかります。この学園は通信制の高校で、夏季講習やスクーリング等の時に学生が集まりますが、普段は職員数名が日中勤務しているだけです。



高島市がこの施設周辺を体験活動「椋川山の子学園」の拠点としているため、市職員や区長が共用部分（体育館、トイレ等がある部分）に入れる鍵は持っているということでしたが、ほとんどの携帯が圏外になる地域なので、職員室に入れなければ電話連絡もできません。滋賀県の場合は、避難時集結場所に安定ヨウ素剤が保管されているのですが、この地区の場合、どこに保管されているのかは分かりませんでした。

・訪問した10軒程の7割は、はっきりと再稼働に反対と語られていました。「福島原発事故を見ていると、取り返しがつかないことははっきりしている」「反対するのが当たり前」と何度も繰り返す80代のおばあさんもありました。大飯原発から30km圏内に入ることはほとんどの方が知っていました。



地域みんなでにぎわいある農村に！
農村まるごと保全向上対策
に地域全体で取り組んでいます。

・昨年には避難訓練もあり、ECC学園まで歩いて行き、そこからバスに乗って今津総合運動公園に行き、スクリーニング検査の訓練があったそうです。安定ヨウ素剤に見立てたアメのようなものをもらった。高齢者が多いので、ECC学園まで歩いて行くのは大変な人もあるとのこと。

・ほとんどの方が万が一の場合はECC学園に集まって、バスで今津総合運動公園に行くことを知っていましたが、県外避難先が大阪府高槻市だということは、誰も知りませんでした。避難先が高槻市の体育館と聞いて「私ら年寄りには環境が変わるとすぐに体調をこわすからムリだ」と語った方もいました。

・京都から有機農業をしに通っていると話されていた男性は、私たちが原発反対の立場で回っていることを知ると、堰を切ったように原発の問題点、そもそも電気を使い過ぎる社会の問題点を指摘され、「また来てください」と応援してくださいました。

1-2 椋川地区（奥の集落）

椋川の奥の集落ではお一人から話を伺うことができませんでした。他にもう一人にもチラシを渡しましたが、時間がなくほとんど話はできませんでした。お話を伺って、足腰の弱った高齢者ばかりとなっており、また、台風の際に冠水して3日間家を出ることすらできない状態になる等、避難が非常に困難な地域であることが分かりました。



椋川地区

- ・昨年、原発事故時の避難訓練に参加した。連れ合いの車でECC学園高等学校まで行って、そこからはバスで今津中学校まで行った。安定ヨウ素剤（模擬）をもらったかどうかは覚えていない。
- ・この辺は、80歳を超え、足腰が弱り、避難するのに頼らなければならない人ばかり。空き家ばかりにもなっている。
- ・（県外避難先が高槻市だと伝えらると）行くまでの道中でどうかなってしまう。
- ・3年前の台風の際は、冠水し、一面が海になってしまい、車も通れなくなり、ECC学園高等学校に行けるようになるまでに3日かかった。このため3日間家の中に居た。帰省していたひ孫のおむつがなくなり、近所の家からおむつを融通してもらった。
- ・雪はこの近所は少ないが、降る時は朝除雪してもらっても夕方には1mくらい降ることもある。

[2] 朽木地区（朽木東小学校区）

2-1 朽木東小学校/ 朽木こども園/ 麻生地区（39世帯・84名）

◆朽木東小学校：学校の避難計画は決まっていない

朽木東小学校と中学校は、「道の駅くつき新本陣」から坂道を上った山の中腹にあります。

小学校を尋ねました。通用口のドアには「熊が入るので必ず閉めてください」の張り紙が。運動会の予行練習中で忙しくされていました。先生の話では、学校の避難計画は具体的に決まっておらず、事故時に子どもを親に引き渡す場合の連絡方法等も決まっていないとのこと。

安定ヨウ素剤は学校に備蓄されていました。ただ、どのように配布・服用させるのか等も決まっていませんでした。

隣には高島市立朽木中学校があり、スクリーニング場所となっていますが、今回は訪問できませんでした。大きな体育館がありますが、中学校の出入り口は一か所で、除染前のバスと除染後のバスが同じ出入り口を使用することになり、国のマニュアルに違反しています。

◆朽木こども園：園の避難計画は決まっていない

小学校の近くに高島市立朽木こども園があります。園長に話を聞きました。UPZ（約30km圏内）に入り、安定ヨウ素剤も備蓄しているとのことでした。しかし、避難計画についてはこちらも、どのように保護者へ子どもを引き渡すのか、安定ヨウ素剤をどこで配布するのか等、何も具体化はできていないとのこと。市から連絡を受けて「屋内退避する」と繰り返されていました。

事故が拡大したときの避難については、バスが来るのか自衛隊が来るのかもはっきりしておら

ず、「市の職員なので」と何度も繰り返し、市に任せていると言うだけでした。直接子どもを守る立場の責任者が、行政に全てをお任せで良いのかという疑問が残りました。

◆旧朽木村 麻生地区 [39世帯・84名]

避難道路の国道367号から県道23号(小浜朽木高島線)に入ると、旧朽木村の麻生地区があります。その先は小浜市に隣接する木地山(きじやま)地区です。今回は、木地山に住む方と一緒に麻生地区を訪問しました。



麻生地区も広く、10軒程が一塊になった集落が数か所ありました。地区のほぼ全域を訪ねました。多くの方が、再稼働には反対と語っていました。やはり、原発から近いため、福島原発事故をわが身のことと感じているようでした。

・「土地柄、小浜に買い物に行くこともあり、福井は近い。原発で事故があれば住めなくなってしまう」「一人住まいの高齢者もあるので、何かあった時は声をかけるように心がけているが、避難となると特に高齢者の場合は難しいと思う」「今年の冬は雪も多かったので、そんな時に何かあれば家からも出られないしどうすることもできない」「事故が起こったら逃げられない。原発に反対だ」「原発に反対だ。そのことを区長さんに言う」「(福島の事故の後) 原発が動いてなくても電気は足りていたのだから、その方法を続ければよい」と話す方もおられました。



麻生川

・県内避難先の「グリーンパーク思い出の森」は原発から約32kmで、避難先としては近すぎると話すと、「あそこは高台にあるので、放射能の影響を受けやすいのではないだろうか」と心配されていました。

・農作業の手を休めて「福島のようになれば家も田畑も手放して避難することになってしまう。原発が動くのは反対です」と話されたお母さんもありました。

・数軒の家では、「電気がたりなくなる」「動かすと言っているからそれでいい」という言葉も聞きましたが、珍しいくらいに少数でした。

・チラシを受け取った70歳前後の男性は、「よく来てくれた。ありがとう」と言ってくれました。それを聞いてとてもうれしかったです。

・出会えなかったお宅には、チラシをポストインしてきました。

2-2 能家・雲洞谷地区

(能家地区：県の避難計画では10世帯・14名。実際は6世帯) / 雲洞谷地区：33世帯・79名)

・能家・雲洞谷は、県道783号が唯一の避難道となりますが、道幅は、対向車と行き違いもできないほどの細い箇所もあり、同県道の針畑(朽木の西側。小川～小入谷)を通る部分よりも細く感じました。土砂災害が起きやすそうな所も多くみられ、補修を行っている箇所もありました。

・能家・雲洞谷を戸別訪問し、能家で4人、雲洞谷で3人の方々にお話を伺いました。

・大飯原発再稼働については、明確にやめてほしいと語る人、嫌だ、賛成はできない、防災対策を立てるべきと語る人、あるいは、自分は構わないが孫子が心配と語る人など、全体的に再稼働を批判あるいは心配する人が多かったです。



県道783号 能家へ向かう

「自分達は年寄りなので、原発についてはそんなに怖いとは思っておらず、もうよいが、若い人たちはこれからなのだから、(原発のことは)心配だ。決して賛成はしていない。絶対安全と言っても、どんなことがあるか分からない。もしもの時の田舎の対策は考えもらわないといけな。福井から山を越えたらこの地域だから、原発事故があったら大変。原発が無いと電気が足りなくなり困るが、原発事故があったら一層困ることになるので、難しい問題」。

「原発を動かすのは嫌、やめてほしい。原発は全て無しにしてほしい。福島原発事故があったにもかかわらず、何で動かすのか。お金も動き、原発関連で働いている人もいるが、子どもの世代を思ったら何が大事なことか」。

・原発事故時の避難計画について、行政から話を聞いた人はほとんどいませんでした。

「高齢者が避難できない。行政によるこの地域への対策が全然足りていない」、「この集落は年寄りばかりで、迎えに来てくれるならよいが。動けるのは自分達くらいしかいない」と高齢者が避難できない問題が指摘されました。

また、「以前、バスが出され、避難訓練があった。それに参加しようと思っても、バスに乗れる人数が限られており、参加できない」と一部の人が参加できていない現状を語る人もいました。



能家地区

・県内避難先(グリーンパーク思い出の森)と県外避難先(大阪)を数人に尋ねましたが、誰も知りませんでした。グリーンパーク思い出の森は、原発から近く意味がない、朽木市場より標高が高いため、より多く放射能を浴びるのではないかと話す人がいました。

県外避難先が大阪であることについては「大阪まで行く道は大丈夫なのか。多くの人が乗用車出したらどうなるのか」との疑問を呈する人や「自分は奈良や東京に孫子がいるから頼れるけれど、親戚のいない人は気の毒だ」と語る人がいました。

・避難先での生活への不安の声もありました。「避難しても、何も持たずに体だけ避難先に運んだ生活では、毎日心配でストレスが溜まり、そちらの方が精神的に不安定になるだろう。狭い場所

で、トイレにも自由に行けない状態になるなら無理に避難しない方がよいと思う」。

・自然災害時の避難について、この前の台風の時、能家から約 17 km離れた朽木市場の朽木公民館（原発事故時の避難集合場所でもある）へ避難する勧告が出ましたが、土砂崩れが多く、台風が少し来ても不通となる県道 783 号ではとても行くことはできないと厳しく批判する人が多かったです。道路に水が溢れるため、特に夜は避難する方がより危険だとの声もありました。

「この前の台風の時も、夜に避難するように言われても、道の途中の低い所は水が溢れていた。集会場まで避難した下の人が朝暗いうちに帰ってきたところ、道がなかった。このような道に出て行った方が、事故が起こる。それ故、避難せよと言われても、家にいるしかないと言っている。避難所（自然災害時の）が遠すぎる。集落内に一つでも安全な所があれば、早くから高齢者も連れて行けるが」。

・自然災害と原発事故を比べ、災害が水によるものであれば目に見えるため、高い所に登る等してまだ対応できるが、放射能は目に見えないため最も恐ろしいと話される人もいました。

・屋内退避について「1日退避していれば大丈夫ということならば、家や蔵に入っていればそれなりにいけるだろう。しかし、原発事故の放射能はどこまで来るか分からないため、やはり屋内退避ではなく、避難しなければならない」と鋭い指摘がありました。



雲洞谷地区

・滋賀県民の避難経路（国道 303、161 号）が福井県民のそれと重なるが、福井県民から先に避難する計画になっていることについて「絶対無理、理解できない」と厳しい意見がありました。

・滋賀県が大飯原発再稼働前に住民説明会を開くのを聞いているか尋ねると「全く聞いていない。開催されれば参加する」とはっきりと答える方もありました。

訪問を終えて

椋川、朽木の自然と、それを大切に守り育てている地元の皆さんとの話を通して、大飯原発の再稼働を止めていこうと、改めて感じた訪問となりました。